



アメリカ合衆国 派遣期間 2012年4月～2015年3月
サンフランシスコ日本語補習校

帰国報告

大空町立東藻琴小学校
教諭 長崎 祐紀

1. はじめに

2012年、私はアメリカの西海岸、サンフランシスコ日本語補習校で仕事をさせていただけることになった。これを読んでいる方で、どのくらいの方が「補習校」というものをご存じだろうか？おそらく多くの方は、日本人学校はイメージできても、補習校はよくわからないのが実情ではないだろうか。私は海外派遣が決まった時、日本人学校に派遣になると思い込んでいた。補習校と決まった時は、一体どのような職務が待っているのか、不安が増大するばかりであった。



補習校に派遣される現役の教員は、私の派遣年度ではアメリカとカナダの6人だけであった。400名を超える派遣教員の中で、6名しか派遣にならないということで、どのくらい少ないのかご理解いただけると思う。現在はシニア派遣が中心となっているようなので、現役の先生方の派遣は少なくなって(あるいは無くなって)いるようなので、とても残念にも感じる。

一般教員であっても派遣と同時に教頭という管理職としての仕事が待っている。そんな補習校について理解を深めていただければと思う。

2. アメリカ合衆国およびサンフランシスコ市について

アメリカ合衆国は、50の州及び連邦区から成る連邦共和国である。アメリカ本土の48州及びワシントンD.C.は、カナダ及びメキシコの中の北アメリカ中央に位置する。アラスカ州は北アメリカ北西部、ハワイ州は中部太平洋における多島海である。同国は、太平洋及びカリブに5つの有人の海外領土及び9つの無人の海外領土をも有する。985万km²の総面積は世界第3位又は第4位、3億1千7百万人の人口は世界第3位である。同国は世界で最も民族的に多様かつ多文化な国の1つであり、これは多くの国からの大規模な移住の産物である。同国の地理及び気候も極めて多様であり、多種多様な野生生物が存在する。

サンフランシスコは、アメリカの中で国際的な都市の一つとして知られている。この町は古くか



らアメリカ太平洋岸の玄関口として栄え、ビジネスマンや観光客の往来も多い。この町の歴史は 1769 年のスペイン艦隊によるサンフランシスコ湾の発見と 1776 年のスペイン人の入植に始まった。現在のミッション地区、「ヤーバブエナ」という町が発祥である。その後メキシコ領となり、米墨戦争(1846～1848 年)の結果、1848 年カリフォルニア州はメキシコよりアメリカ合衆国に割譲された。サンフ

ランシスコという名は、1847 年キリスト教宣教師「聖フランシス」に由来して名付けられ、現在に至っている。

サンフランシスコの開発は 1848 年のゴールドラッシュに始まる。当時 800 人ほどの町は、約 10 年後の 1860 年には 100 倍近い 6 万人まで増えた。さらに、1869 年には大陸横断鉄道が開通し、カリフォルニア州の今日の繁栄の基礎が築かれた。しかし 1906 年大震災に見舞われ、3 日間にわたる火災で市のほとんどが壊滅した。現在の町は、その後に再建されたものである。

ここサンフランシスコは日本との関係も深く、今から約 150 年前の、1860 年、勝海舟や福沢諭吉らに乗せた咸臨丸がサンフランシスコ港に入港している。また、第二次世界大戦後の 1951 年には対日平和条約とともに日米安全保障条約が締結された地としても知られる。

サンフランシスコはアメリカ西部における金融業や商業の要所であり、すぐ近くにはカリフォルニア大学バークレー校やスタンフォード大学等を持つ学術・文化の中心地でもある。また、サンフランシスコの南、サンタ・クララ郡は通称シリコンバレーと呼ばれ世界のハイテク産業の中心となっている。

サンフランシスコは、人種の多彩な地域である。町のあちこちに異文化コミュニティが存在している。アメリカ国内の他都市に比べて、東洋人の比率が高くなっている。主に使われる言語は英語であるが、スペイン語や中国語等(広東語)もよく耳にする。宗教的にはキリスト教(プロテスタント・カトリック)が主で、仏教も見られる。

サンフランシスコは、北緯 38℃線近くに位置し、ワシントン DC やアテネ、新潟市と同緯度にある。地中海性気候帯に属し、典型的な夏乾冬雨の気候である。1 年を通じて温和で寒暖の差が少なく、空気は乾燥している。雨は 12 月から 3 月にかけて降るが、この時期以外にはほとんど降らない。7 月、8 月は市内、特に太平洋岸沿いで霧が深く、陽がささない日が多く、寒く感じる(現在、派遣教員の住宅があるのはこの地域)。

年間を通して霧がよく発生する。朝晩は冷え込むため、夏でも暖房を入れることもあり、ジャケットやジャンパー等は年中はなせない。日中、陽が出ると暑く感じる。一番寒く感じるのは 12 月から 1 月にかけての 2～3 週間である。この時期はコートが必要である。赴任時期の 4～5 月にかけては、かなり肌寒い日があるので寒さに対する備えを十分にしておく必要がある。

サンフランシスコ市は、サンフランシスコ半島北端部に位置し、三方を海に囲まれた丘陵地帯にある。面積はわずか119㎢のこじんまりとまとまった都市で、市内には起伏が多く、「坂の街」といわれる。1873年に誕生した世界初のケーブルカーが走るサンフランシスコは、温かな気候と風光明媚な土地柄で、多くの観光客の訪れる観光都市でもある。

このサンフランシスコ市の人口は約80万人。サンフランシスコ市周辺都市をあわせて、「ベイ・エリア」と呼ぶが、ベイ・エリア全体の人口は700万人にも達する。

3. サンフランシスコにおける教育事情

(1) サンフランシスコ日本語補習校の概要

本校は、「理事会」「学校」「保護者(会)」によって運営され、1968年児童生徒数101名教員5名でスタートした。その後の経済成長と共に学校規模も大きくなり、現在では幼児・児童・生徒数が1500名を超える世界第1位の補習校になった。日本国政府からは外務省より財的支援を、そして文部科学省からは人的な支援として教員(校長一名、教頭二名)の派遣を受けている。

サンフランシスコ地区とサンノゼ地区にそれぞれ幼稚部・小学部(同一校舎内)と中高部を抱え、4校で毎週土曜日に授業を行っている。開設教科は、

小1・2年生	国語②、算数、活動(生活科)	4時間
小3～6年生	国語②、算数②、社・理科	5時間
中1～3年生	国語②、数学②、社・理科	5時間
高1・2年生	国語②、数学②、社会科	5時間

であり、年間授業日数は47日間となっている。現地校が夏休みに入る6月第3週から2週間は、連続して10日間の集中学習を行う。小中学生は、この集中授業を終えた後、日本の学校に体験入学する子どもも多い。

週一回の補習校ではあるが、日本と同様に入学式・卒業式はもちろん、運動会や文化祭などの行事も行っている。

(2) 現地校の現状

① 現地学校制度

州や学区によって学校制度が異なるが、カリフォルニアでは義務教育年齢は6才～17才で、学校は年齢によって、小学校(エレメンタリースクール:6才～10才)、中学校(ミドルスクール:11才～13才)、高等学校(ハイスクール:14才～17才)の三段階に分かれる。サンフランシスコ市では、上記の5-3-4年制をとっている。



② 就学年齢

12月1日現在で満5才になる児童が、その年の9月（または8月末）からキンダーガーデン（幼稚園）に、満6才になる児童がエレメンタリースクールに入ることができる。

新学期は8月下旬始まりで、学齢の区切りは12月1日である。

③ 学区（スクール・ディストリクト）

サンフランシスコ市内は基本的に学区制が敷かれ、小学校では学区内の児童が優先されるが、中学校では特に優先されない。

④ 入学手続き・編入手続き

公立の入学手続きは、毎年11月頃から始まり3月頃決定する。原則としてその後いつでも受け付けるが、定員に達すると他の学校に行くように言われる。手続きは、サンフランシスコ市の教育局にて行う。編入学は、通学する学校が決まったら、学校に出向いて手続きを行う。

⑤ 学校について

ア 保育園（プリスクール）の段階

おむつがとれれば、2才半ぐらいから4・5歳まで預かってくれる。現地の英語で行う保育園の他に、サンフランシスコ市内には日本語で保育をしてくれるリトルエンジェルス、また、日本語と英語の両方で保育をしてくれるリトルフレンズ・ABC等がある。授業料は1ヵ月500ドル～700ドル程度である。公立の小学校に併設しているプリスクールもあるが数が少ない。

イ 幼稚園（キンダーガーデン）の段階

5才になればキンダーガーデンに入ることができる。キンダーガーデンは小学校に併設していて、小学校前の教育を行っている。教育内容は日本の幼稚園と大差はない。授業料は無料。

ウ 小学校（エレメンタリースクール）段階の教育

キンダーガーデンから5年生までが小学校に在学する。授業料は無料。随時入学できる。以前は英語力のない児童に対してはESL学級（ENGLISH AS A SECOND LANGUAGE）を置いている学校もあったが、現在はほとんどない。クラレンドンエレメンタリースクールやローザパークスエレメンタリースクールなど、日本語のプログラム（JBBP）をもっている学校もある。

エ 中学校（ミドルスクール）段階の教育

6年生から8年生までがミドルスクールに在学する。授業料は無料。随時入学できる。3年制である。

オ 高等学校（ハイスクール）段階の教育

こちらではハイスクールも義務教育であり、随時入学でき、授業料は無料である。日本の中学2・3年生がハイスクール1年生となる。4年制である。

4. 派遣教頭の職務について

派遣されると同時に、教諭であった身分がその時点で教頭という職になる。管理職という立場の研修を受けないままの「教頭役」、さらに責任の大きさに戸惑うばかりであった。派遣教員は時には教頭であり、時に教務、時には指導主事の役割を担わなければならない。現地について2日後の入学式では、校長に代わって式辞を代読するという大役が与えられ、大変緊張したことをよく覚えている。



各校（幼小部2校、中高部2校）ともに主幹がおり、フルタイムでの勤務体制が整っているため、派遣の教頭職としての仕事は以前に比べてずいぶんと軽減されている。派遣の担当としてはサンノゼ地区とサンフランシスコ地区に分かれてはいるが、全体的に校長を含めて週ごとに巡回（ローテーションは規則的ではない）する形となっている。全体をもれなく把握し、派遣の力を均等に提供する目的でのことと思うが、その反面、1つの地区に腰をすえての仕事ができないとも言える。例えば、子どもの情報や講師の情報などが希薄になることが懸念される。つまり、今週行った学校で何か問題があっても、また来校するのは一ヶ月後といったことがよくあるため、細かな連絡・調整が必要になる。そのためオフィスでの情報交換は当然であるが、なるべく主幹との情報交換に努め、

常に意識する必要がある。オフィスで行われるミーティングでは、生徒指導交流や講師の問題について、多くの時間を費やすのである。学校ごとに自分のノートにまとめ記録しておくなど自身の工夫が必要である。

その他、火曜日から金曜日はオフィスに出勤し、事務作業を行う。火曜日は、授業で行った各地区の教材や日誌など回収したものを車に乗せて、オフィスに出勤するところから始まる。車の運転に関して言えば、アメリカで車の免許を取得したとはいえ、大都市のダウンタウンを一人で運転するのは、楽なことではない。いつも接触事故や違反に気を配りながらの運転であった。授業日に向けて金曜日には、多くの教材・プリント・日誌・備品を乗せて借用校に向かう。サンノゼ校にあっては、朝6時半過ぎには家を出て、ハイウェイを使って片道1時間をかけて通勤しなくてはならない。また、治安についても良いとは言えない。駐車の際は、車上荒らしに十分な注意が必要である。講師や保護者の車が被害に遭ったという話は何度も耳にした。常にここは日本とは違うのだと気を引き締めていなければならない。さて、話をオフィスの仕事内容に戻すと、オフィスミーティング(授業日にあった事柄を交流し、校長から指導・指示・助言をしていただく)、講師との打ち合わせ、研修計画の策定・資料の作成、高等部入試問題作成、海外子女教育振興財団との連携、文集の印刷、各種作品展の応募、通知表印刷などなど実に多岐に渡る。朝から夕方までパソコンの画面を眺めながら、あっという間に1日が終了していく印象である。

この職務の中で、校長との連絡調整をしつつ、管理職として教頭職をする仕事も大きいですが、実務

に多いのが現地採用講師への指導・助言などの研修業務という指導主事的業務が多くを占めると言える。



授業日にはその日の担当となった学校に赴き、職員朝会から勤務終了までその学校で過ごす。管理職としてその学校に出勤しているため、責任も大きい。緊張感をもったまま、講師の授業を参観したり、安全面を確認するため見回りをしたりして1日を過ごす。あまりに多くの学級があるため、1日の中で全ての学級を参観することはできないが、何クラスかを参観して、その先生方に授業の感想やアドバイスなどをしていく。担任になら

れている先生方の多くは、保護者の方や、他に主となる別の仕事をされており、副業として勤務されている方が主である。したがって教員免許を持っている先生は少なく、初めて教壇に立つという方も少なくない。そのため、学習の指導技術から生活指導、教師としての心構えなど多岐に渡り指導をしていく。直接面談をしながら指導する場合もあるし、メールや電話にて、お話しさせてもらう場合もある。悩みながら指導に当たっている方も多く、どのように適切なアドバイスをしていったらいいかを日々考え、子ども同様に講師の先生方に寄り添い、認めながら指導していくように努めてきた。

研修業務としては、初任者研修での講義、模擬授業でのアドバイスをはじめ、長期休業中の各種研修講座の講師として指導にあたるのが中心となる。通常、日本でしてきた仕事からは離れるので、子どもたちとの触れ合いが少なく寂しい思いもあるが、教頭として全校朝会で挨拶をしたり、各種行事での講評・表彰をする際は、できるだけ子どもたちと接点をもてるように努力してきた。



研修業務の中でも、主な職務に模範授業がある。

文字通り講師の方々の模範となるような授業を年6回（小学部4回、中学部2回）を原則として行った。直接会話することも少ない子どもたちの中に突然入り、「模範」とされるような授業をしなければならないのであるから、そのプレッシャーは相当なものがある。初めて入る学級では、子どもたちの個性や雰囲気とうまく捉えることができず、なかなか思うように授業を展開できないことも多い。また、もともと先生方に「範」を示せるほど授業が上手なわけでもない。それでも先生方は日本の最新の教育技術を少しでも身につけようと瞳を輝かせて授業を参観されているので、さらに緊張が増すのである。今でもその緊張は忘れられない。

私自身は小学校で20年勤務してきたが、中学校での授業はこの模範授業が初めてであった。そ

の上、本来入らないはずの高等部からの依頼(現社・現国・数学)があったりして、本当に戸惑った。派遣とはいえ、高等部での授業、指導、講師へのアドバイスなどは困難であるが、少しでも高等部の講師に役に立てるように、派遣教員も研修を進めなければならない。

また、指導面では周辺の「派遣のいない補習校」への巡回指導がある。



平成26年度の本校の巡回指導はコロラド、デンバー、セントラルバレー（フレズノ）の3校の巡回を行った。（10月、11月）。私の場合派遣3年目であったが、初めての知らない学校への巡回指導となり、とても緊張しながらの指導となった。たった一人でアメリカの国内航空線出張しなければならず、心細く不安な旅である。しかし、行った先々で感謝してもらえたことはとても嬉しかったし、自分にとっても良い経験となった。またそこでは素晴らしい人々との出会いがあった。巡回をする学校は、サクラメント、コロラド、デンバー、ラスベガス、セントラルバレーの補習校



が対象となる。いずれも日本からの派遣教員はおらず、現地の邦人団体・日本人会が作っている私立の学校である。どこも、講師の研修意欲がとても高く、保護者の教育に対する関心も同様に高い学校ばかりであった。毎年巡回指導に伺えるというわけではないが、できるだけ希望に添えるように努力していく必要がある。

西海岸の現地採用講師が集まっての研修会もあり、校長を含めた派遣教員が講師として現地に赴く機会もある。

5. 現状の課題

- ① 子どもの入学増加に伴う学級増に、講師の人数が足りない（講師を希望する人や、講師としてふさわしい人材の不足）。それでも、順次補充してもらい、代行・専科などの仕事から入ってもらったり、次年度の担任要員として確保したりしている（平成 26 年度の初任者研修は既に 6 回、それに伴う模擬授業も 6 回実施）。また、採用となっても、実際に教壇に立った後、やはりできないといった理由で辞めていく講師や、明らかに仕事に向いていないと判断される講師もおり、指導している我々にとっても、現場の講師陣にとっても大きな痛手であり、いかに対応していくか大いに悩む部分である。
- ② 学校規模が拡大しており、校舎の借用が難しくなってきた。どんどん生徒数が増えてきているため、人数が収まる教室数が足りないのが現状である。その上、各地区のディストリクト(教育委員会的組織)も我々のような外部団体に公立の学校を貸すことを渋り、借用は現在ますます難しくなっている。現在は幼小部の一校は私立の学校を借用している。教室や学校環境が清潔で使いやすく、講師や父母からも好評であるが、借用料が公立の中学校・高校に比べてとても高いのが問題である。
- ③ 日本で使用している教科書を使って学習しているが、日本と同様の内容を年間 47 日で身に付けるのは、そもそも無理がある。帰国した際に、スムーズに学校に戻れるような学力を身に付けさせるということは、とても難しいといえる。カリキュラムを工夫したり、指導すべき内容を絞り込んだり工夫して実施しているが、どうしても講師からは同様の悩みが聞かれる。「指導時間が足りなくて、力をつけさせられない。どうしたらよいか」という声だ。引き続き工夫をしながら、学力向上に努めていかなければならない。

6. おわりに

この 3 年間でかけがえのない経験をする事ができた。今まで自分がいた立場とは違った立場で仕事ができ、いろいろな見方ができるようになったと思う。講師達は別の仕事を抱えながらも、毎週 10 時間の教材研究をして、ひたむきに、熱心に授業に臨んでいる。その姿に、日本の現場で働いていた自分の姿を重ね、恥ずかしくなったものだ。海外で日本の子どもたちのために、一生懸命頑張っている人々や子どもたちの姿を、いろいろな場面で伝えていけたらと思っている。もし派遣される機会を得たならば、この素敵な仕事にぜひ携わっていただきたいと願う。